column

仕事と育児の両立、ほんとうのところ

２０１２年、長女が3歳の時に、県内の企業や組織にワーク・ライフバランス（以下ＷＬＢ）の推進をおこなうために会社を立ち上げました。会社を登記して2週間後に、第二子の妊娠が発覚しました。

あれから10年。世の中はどう変わったのでしょうか。私の子どもたちも、13歳と10歳になりました。喉元過ぎれば、ではないですが、新生児、幼児期のような育児の大変さは、今はもうありません。けれども、今でも当時の事を思い出すと、「大変だった」という記憶が蘇ってしまいます。

当時の私は、世の中にＷＬＢを推進しながら、自分自身のＷＬＢに悩んでいました。特に、下の子が2～3歳である２０１３年～２０１４年頃は県内でも少しずつＷＬＢが認識され始め、仕事も頑張りたい頃でした。無事に下の息子も保育園にはいれて、また夫の両親もとても協力してくれていたので、恵まれている環境ではありました。けれど、心が辛かったのです。当時夫は仕事の都合で、朝早く家を出て、夜遅い帰宅でした。朝、子どもたちが起きてから保育園に連れていくまでのドタバタ時間、夕方子どもたちを迎えてから、ご飯、お風呂、家事、寝かしつけまでの時間、その時間を一人で担う事がほとんどでした。コントロール不能な慌ただしさや、思い通りにいかない事だらけの積み重ね、それらをタイムリーに共有できる人が居ない、思い通りには育児に向き合えていない自分を責める、という悪循環で、心がどんどん追い込まれていったのです。

「何のために、私はＷＬＢを推進しているのだろう」と何度も思いました。そして自分自身の葛藤を、ＷＬＢ推進の原動力にしていました。辛さも含めて話せるのは、夫しかいません。それは悲痛の叫びとなって表現されました。夫も、辛かったと思います。そんな中夫はどんなに遅く帰ってきても家事を良くやってくれていました。私が子どもたちの寝かしつけをしながらそのまま寝てしまった日には、キッチンに溜まった食器を夜中に洗い、そして朝は、子どもたちが起きる前に出ていく事も多々ありました。私は夫の仕事そのものを心から応援していました。大変な役割を担っている事も分かっていたため、夜中に家事をさせてしまう、そんな自分をさらに責めてしまうという状態でした。当時、私達は心身ともに疲弊しながらも、本当に良く頑張っていたと思います。

このように「育児と仕事の両立のほんとうのところ」は、職場の中では話す機会がありません。制度が整っているから大丈夫、とか社会もこれだけ寛容になってるのだから恵まれた時代だよね、と確かにそうかもしれませんが、なかなか表面には出てこない事も多々あるのではないかと思うのです。育児と一言で言っても、子どもの特徴や性格によっても全く違います。「実は我が家はこんな事で困っ